

## 緒言

柳 田 聖 山

本研究所の研究報告第四冊（一九九五年度）として、茲に村上俊君の遺稿集「唐代禪思想研究」を公刊する。

主題のような研究成果を、本研究所研究報告の一冊とすることは、同君生前時の約束であり、誠實な君の強い意旨であった。昨年六月十三日、思いもかけぬ急逝以後、身心に徹る深い悲しみのうちに、君が生前に発表した各種の雑誌論文を集め、君の居室に残された生原稿を整理し、こうした巨冊をまとめあげてくれたのは、君が研究者として近來特に信頼し、相互に深く期待しあうことのできた、わが國際禪學研究所の、若い研究スタッフ諸君である。私たちは今、あらためて君の急逝を悼むと共に、君が斯學にうちこんだ誠實心にうたれている。

研究報告全體の主題と構想は、君が机邊にのこしたメモによるので、君の遺志に大きく辜負するまいが、幸いに君が健康を恢復し、自ら新しい構想の下に、あらためて書きおろし原稿としたら、かなり今のとち

二  
がったものになったかも知れず、くりかえし斷腸の思いにかられるのである。

私（柳田）が始めて君と相識したのは、一九八八年の四月、私が名古屋から京都にかえり、再び母校花園大學に隸して、新設の國際禪學研究所長として、研究諸般の整備に従うほか、大學の文學專攻科の諸君のために、新たに中國佛教を講じた時である。專攻科の學生は少なかつたが、君がその中にいることで、私は久しぶりに研究者として初心にかえる。

曾て京都大學人文科學研究所で、宗教部門の共同研究に列し、班長の塚本善隆先生をはじめ、木村英一、横超慧日、長尾雅人、入矢義高、島田虔次先生の御指導で、僧肇を読んだ時の感激を、五十年ぶりに味わうことができた。佛教はインドに起り、中國を経て日本にくる。現に今も、人々の心に生きつづける巨大な世界宗教の一つであるが、中國民族の宗教としての、歴史的な中國佛教がその基礎となっているのを、學問的に確認する仕事は、これまで意外に少ないのでないか。紀元前後から約一千年、斷續的に集大成される、龐大な大藏經がテキスト。謂わゆる儒佛道三教交渉史の分析なしに、漢譯大藏經は讀めない。それは又、私自身の五十年來の課題で、すでにささやかな自分史の一部である。

思えば塚本善隆先生を班長とする肇論研究は前後十五年におよぶ第二次大戰のあと、東西東洋學研究の窓が開かれて、神田喜一郎先生がパリに行かれたとき、不幸な第二次世界大戰の下で、オランダのリーベントールが單獨に研究をまとめ、ベルギーで公刊していた成果の検討を、コレージュ・ド・フランスのドミエヴィルより求められたのが動機。

言ってみれば、リーベントールの仕事は、日本の東洋學者への學問的挑戦で、日本側の戦後の新しい成果は、昭和三十年に公刊される「肇論研究」（法藏館）がそれだ。私たちの神會再發見を導く、ジャック・ジェルネや胡適の仕事も亦た、リーベントールが動機である。

一九八八年以後、私はあらためて中國佛教にとりくみ、自分なりに非力をつくして、何本かのボーリングを試みる。講義題目は毎年更新するが、研究動機は自分なりに變わらず、肇論以後の人文科學研究所の、先學の諸成果をたどるのだが、あらためて自己の能力を反省し、切に希求しつづけたのは、若い共同研究者の、持續的な協力、援助である。

眞諦の佛性論や唯識など、曾ての私の關心を出る、未知の研究分野について、骨身をけずりつづける私、無口な君の存在に氣付くのは、やや後のことであつた。數奇な前歴をもつ君の能力に、私が始めて畏敬の思いを深めたのは、入矢義高先生の御指導によつて、君が雲門文偃の語を吟味する、心理學的な扱いについてである（禪文化研究所紀要第十七號、一九九一年五月）。これまでの禪語録を相手どる、一般の解釋や理解とはるかにちがう、科學的客觀的な讀みの背後に、かえつて生きた禪者の煖皮肉が、見事に分析されているのだ。

恰も一九九二年、私は佛教傳道協會賞の榮譽をうけ、思いもかけぬ高額の副賞金を得て、全てを君に託すること、年來の課題を集大成することを思いつく。君は花園大學國際禪學研究所の特別研究員として、當時龍谷大學文學部（佛教學科）教授北畠典生、同上山大峻兩氏について、専門研究に専念すること二年、矢繼ぎ早に多數の成果を出す。

現龍谷大學長北畠典生博士は、私がかねてひそかに畏敬する斯學の泰斗。私は結果的に君が、自ら最高の師にめぐりあつた不可思議に深い共感を禁じ得ない。君の龐大な遺品圖書の中に、「華嚴法界義鏡講義」と、「佛教の基礎入門」（共に永田文昌堂）の二冊を見つけて、私は今あらためて涙するのみ。私たち周縁者のささやかな通夜と出棺、茶毘の日も、君がお世話になつた龍谷大學關係諸氏の姿に、私はただただ絶句合掌したのである。

もともと上山大峻氏はチベット譯楞伽師資記の發見者で、昭和三十年代以後、京都大學人文科學研究所に設えられる、英佛露各國に分散する敦煌文獻の寫眞を、総合的に調査研究する仕事をふまえ、八世紀の唯識學者曇曠を軸に、かねてドミエヴィル博士が提起するラサの宗論を修正し、戦後の敦煌佛教學に金字塔を樹立したる人。近代の東西敦煌學に大きく寄與する大谷探險隊の蒐集文物が、新たに調査整理されたのと、長く京都大學人文科學研究所で、東西文化交渉史と塞外文化の研究に、大きい成果をもつ藤枝晃博士の御縁もある。私は村上君が龍谷大學關係者について、新しい眼を開くの、私かに期待したのである。

本研究報告の主部をなす各論稿は、すべて右のような學問的氣運をふまえ、村上君が若い情熱を燃えたぎらせて、一氣に書きあげたものであり、君の机邊に遺された生原稿や斷片メモも、すべて同じ土壤から芽生えている。君の研究テーマが、主に華嚴學系に集中しているのは、おそらく龍谷大學大學院の先學諸氏の、影響指導の成果であろう。湯次了榮、高峰了州博士以來、中國華嚴の思想史研究は、龍谷大學の手堅い學問傳統の一つ。君は中國佛敎をもつため、先ず可能で、手堅い基礎構築に、單身挑戦したのである。そんな君の猛烈な研究意欲が、君の生來ひ弱な肉身を損し、健康を阻害させる結果となるのに、もう少し早く氣付いていたらと、私たちは今にして後悔をくりかえすのだ。

さらに又、今回の研究報告第四冊の公刊に先立って、恰も早稻田大學の石井公成博士が、「華嚴思想の研究」(一九九五年、春秋社)を恵まれた。長い地道なテキスト研究をふまえる、周到且つ斬新なる、中國佛敎への新しいアプローチで、八百ページを超える巨冊、石井公成博士は、私の畏敬する舊知の碩學。中國華嚴の研究は、同じく私の畏敬してやまぬ鎌田茂雄博士の仕事以來、主に東京大學の學統となっている。舊い

傳統教學をふまえる石井教道、坂本幸雄博士の初期研究に對し、戦後始めて新羅の素材を加え、領域擴大を試みる金知見博士の、均如研究の大著もある。

石井公成博士の「華嚴思想の研究」は、三藏佛陀の華嚴經兩卷旨歸と、敦煌寫本中の地論宗南道派の文獻をふまえる、中國佛教としての華嚴學の發生研究である。從來殆ど顧みられぬ大集經の影響や、新羅、高麗の華嚴學に、新しい光をあてている。私が多年手がけて來た初期禪宗が、視野に入るのは勿論のこと、獨力で果たし得ぬ初期禪宗の背景が、漸く地道に腑分けされる。華嚴經兩卷旨歸は、金澤の稱名寺に傳來し、今は金澤文庫に保管される天下の孤本。日本と敦煌という、周邊民族の佛教が、今に傳える中國佛教の根雪の一つ。私は傳教大師將來の曹溪大師傳や、興聖寺本六祖壇經によって、敦煌本六祖壇經の腑分けが可能となった、昭和初期の禪學研究を想起している。

とりわけ一九九四年正月は、中國社會科學院の方廣鋁博士が、龍谷大學西域文化研究會の招きで來日し、我が花園大學國際禪學研究所に立ち寄られた。博士來日の動機は二つ、すでに世界各地の敦煌文獻が、寫眞によって綜合できる現在、その發現以來一世紀の研究成果をふまえ、東西の關係研究者の情報交換をより緊密且つ適確化しようとするもの、もう一つは從來未公開であった、北京圖書館の目録外未整理資料が、漸く一部の整理を終って、公開段階に來ているのを、特に日本の關係研究者に報告するもの。手始めに般若心經と心王經關係資料など、初期禪宗の基本資料を持參し、情報交換をはかろうというのだ。

初期の般若心經關係注釋資料は、私の研究分野の一つ。さらに又敦煌本心王經は、ここ數年來、早稻田大學の伊吹敦氏が、ソグド語譯のテキストをふまえ、意欲的に読み込んでいて、私も亦た大きく啓發されたが、何分にもテキストが斷片で、全貌を把えにくいところがある。今度新たに公開された、その上巻は完全であり、これまで豫想された以上に、多くの疑問に答えてくれる。テキストは明らかに上巻とあり、隋の衆

經目錄以來、つねに頭陀經二卷とするが、現存の上巻は、それなりにまとまっている。心王經は修心要論に引用あり、あきらかに初期東山法門のテキストだった。照明菩薩、心王菩薩が對告衆で、頭陀行の觀心釋が主題。伊吹敦氏の努力は、ここで一轉機を得る。

私も亦た方廣鋳氏のおかげで、いろいろの課題を洗い直す機にめぐまれ、とくに「初期禪宗史書の研究」（一九六七年）以後、斷片的に發表した關係論文を集めて、「禪佛教の研究」を編み、テキストの補完をめぐっていた矢先で、「心王經」上巻の全巻出現は、私にとって正に絶大の好機。「心王經」上巻をふまえて、私は新たに全體的解説を加え、やや長い補説一編を書くのだが、そうした私のポイントを、最もよく理解してくれたのが、ほかならぬ村上俊君である。

花園大學大學院專攻科で、毎年くりかえす中國佛教のほか、研究所の自室に君を招き、その人を相手に私は思いのたけを語ること二年。私は自分の思いを語ること考え、考えては語りつづける。同じ話のくりかえしが多く、さぞや迷惑だったろうが、時々切りかえしてくる君の質問が、如何に私を元氣付けたことか。今、君を失って、私はもう何を考え、何を語ってよいのか、あたかも鍾子期を失った伯牙そっくり、私はすでにペンを折っている。君が若し私の意圖を、自ら新たに書きおろしたらと、くりかえし愚癡ることを許されよ。

曾て訪れた黄梅縣東禪寺で、二十年ぶりに國際會議を開くというので、特に私を招いてくれた主催者に、私が病氣で参加できぬ旨、君に代筆の返事をたのんだのも、おもえばすでに三年前の夏。君は私が自分に想起する通りの現地を、私以上に佛彷彿させる文章を、一舉に書いてくれたことがある。君は曾てそこにいたのであるまいか。君が逝った夜、君のデスマスクを拜んで、私は思わず東禪院心王明照大士の名をとなえた。はにかみやの君は、そのとき少し唇をゆがめたように思う。

この緒言も亦た、そのことの辯明の一部にすぎぬが、君が残した論稿を詳しく読み直し、あらためて勇氣付けられること多々、漸く君の一周忌を迎えて、あえてこの研究報告をふまえ、君がのこした課題に答え、さらに新しい展望を開いてくれる、若い未來の友人たちに期待するものであり、さらに又人づきあいのよくな  
い君が、あえて心の奥を語りあつたらしい、少数の龍谷大學關係の先學に厳しい點檢を乞う次第である。

一九九六年六月五日

洛北紙屋川畔、花園大學國際禪學研究所分室にて、